氏名	清藤一郎
学位の種類	医学博士
学位授与番号	甲第43号
学位授与の日付	昭和36年3月31日
学位授与の要件	医学研究科内科系内科学専攻 （学位規則第5条第1項該当）
学位論文題目	**Virus 性肝炎の慢性化に関する臨床的並びに病理組織学的研究**
論文審査委員	教授 小坂淳夫　教授 平木潔　教授 妹尾左知丸

学位論文内容要旨

過去6年間の肝生検施行 Virus 性肝炎患者360例を組織像に基づいて病型分類し，退院後の遠隔成績を検討した。

死亡率は肝硬変の11%，退院後黄疸出現率は3%，退院後自覚症の全くないものは11%に過ぎず，疲れ易い．全身倦怠感等持続するものが多く，び漫瘢痕型が最も多かった。精密検診では，急性肝炎の慢性化35%，又慢性肝炎の45%，肝炎後肝硬変の85%に肝機能障碍の持続を認めた。再入院患者の肝組織所見の推移によっても本疾患の悪化の段階が実証された。

次に164例の肝生検標本につき，肝臓内の結合織線維増殖の状態を組織化学的に検索した。

Virus 性肝炎においては早期に小葉内に新生嗜銀線維の増殖を高率に認め，経過と共に老成嗜銀線維を多く認め，これらは次第に膠原化するに至るものと考えられる。進行性慢性肝炎ではグリソン氏鞘の新生嗜銀線維の増殖が著明である。嗜銀線維新生の原因は，肝細胞壊死の外に，肝細胞変性像，類静脈洞壁の漿液滲出等に関係する。

膠原線維の新生は嗜銀線維の新生よりおくれ，一部は老成嗜銀線維より移行する。

弾力線維増殖は膠原線維より低率で，肝炎後肝硬変中，瀰漫性線維化症の組織像をもつものに著明であった。

副腎皮質ホルモン使用により線維化抑制作用が認められた。

（岡山医学会雑誌　73巻1号（昭和36年1月発行）に掲載予定）

論文審査の結果の要旨

清藤一郎提出の「Virus 性肝炎の慢性化に関する臨床的並びに病理組織学的研究」に関する学位論文につき審査した結果の要旨は次の通りである。

著者は第一編において昭和28年より32年まで岡山大学医学部第一内科に入院し，肝生検により確実な診断を受け，治癒又は軽快退院した Virus 性肝炎及び肝炎後肝硬変症360例につき，退院後の遠隔成績を詳細に亘り検討した成績をのべ，本疾患が治癒困難で，慢性肝炎更には肝硬変への移行を組織学的にも把えうる実例を提示した。

次で第二篇においては慢性化に重要な肝線維化過程を肝生検材料164例につき組織化学的に詳細検討した。その結果生ず嗜銀線維では Virus性肝炎罹患早期において膨化肥厚，籠状密集，銀粒子密集等の幼弱線維として出現し，小葉内に高率に出現し，次第に症状の遷延化と共に銀顆粒点状沈着，増殖密集等の老成線維に変化する。斯くして次第に膠原化す。血清肝炎ではその速度はより早く，大である。嗜銀線維の新生には特に類静脈洞壁における漿液滲出を重視した。次に膠原線維を新生，老成に分けて検討した処，膠原線維の増殖はグリソンG鞘の本来の膠原線維の出現による膠原線維増殖のみならず，老成嗜銀線維が次第に膠原化に至るものも可成りあることを証明した。又弾力線維についても詳細に検討し，その証明率は少いが，Z型肝硬変に移行するに至るとその増殖が著明となることも明かにした。尚以上の線維化防止に副腎皮質ホルモンが効果的であることも証明した。

以上の通り本論文は新しい知見に富み，学術上有益であり，著者は医学博士の学位を授与せられるべき学力を有するものと認める。